

## 2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	准教授	尚 爾華
最終学歴	学 位	専門分野
札幌医科大学大学院医学研究科博士課程修了	博士 (医学)	公衆衛生学、予防医学

### I 教育活動

#### ○目標・計画

##### (目標)

乳幼児、児童生徒から高齢者までの健康に関する基本的な知識を十分身につけることを目標とする。

##### (計画)

教育にあたっては、建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」に基づいた教職員の心構えを基本として、学生のモチベーションを維持しつつ、効果的な指導を心がける。オリジナル講義科目の教材を開発する。

#### ○担当科目（前期・後期）

（前期）食と健康、健康管理論、わたしたちの身体、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、卒業研究

（後期）小児保健論、学校保健、衛生学、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

#### ○教育方法の実践

大人数の講義では、学期初めに科目フォルダーに授業の配布資料をアップすることや、オリジナルテキスト（冊子）を導入した。また、明確的な評価方法を示し、毎回の小テスト実施など、学生の授業に対する緊張感を保ち、授業計画通りに実施することができた。

演習では例年よりも多くの学生（6名）が卒業論文に取り掛かり、単位認定された。演習学生に指示出して、卒業ゼミナール発表会をミスなく運営した。一方、学習意欲の低い学生に関しては、個別補習を行うなど工夫した。

#### ○作成した教科書・教材

各授業に講義用スライドを15回分、学生メモ用配布資料15回分をそれぞれ作成した。オリジナルテキスト（冊子）を作成し、授業内容に応じて配布した。

#### ○自己評価

大人数の講義では、学期初めに科目フォルダーに授業の配布資料をアップすることや、オリジナルテキスト（冊子）の導入などによって、教育効果が向上した。また、明確的な評価方法を示し、毎回の小テスト実施など、学生の授業に対する緊張感を保ち、授業計画通りに実施することができた。

演習では実践的な学習を取り入れることにより、学生が習った知識を生かすことができ、自信を持つことができた。また、例年よりも多くの学生が卒業論文に取り掛かり、4年間の集大成として単位認定された。ゼミナール発表会でも演習学生がグループを分けてミスなく運営できた。一方、学習意欲の低い学生に関しては、個別補習を行うなど、演習の単位を全員取得する良い結果につながった。

## II 研究活動

### ○研究課題

- ①少子高齢化社会における出産・育児および乳幼児・児童生徒の保健に関する国際比較
- ②地域高齢者を対象とした健康増進に関する調査研究

### ○目標・計画

#### (目標)

- ①日本と中国における少子化対策や乳幼児、児童生徒の健康問題について、昨年度の予備調査結果を踏まえ、更に調査対象者を増やして調査を続ける。その結果を学会にて発表し、論文にまとめる。
- ②名古屋市にある複数の福祉会館において、健康体操教室に参加する高齢者の健康状況に関する調査を継続していく。

#### (計画)

- ①名古屋市、上海市（中国）における乳幼児、児童生徒の健康問題について現地調査を行い、調査対象者を増やす。また、世界保健機関や厚生労働省から発表されたデータなどを参照し、国際比較を行う。
- ②名古屋市内の健康体操教室に参加する高齢者の調査研究を継続する。参加者における健康増進効果に関するデータ収集を行う。特に、今年は聞き取り調査に重点を置き、中高年女性の健康に影響する因子に関する研究を継続して行う。

### ○2011年4月から2019年3月の研究業績（特許等を含む）

#### (著書)

- ・尚爾華、澤田節子、谷村祐子、肥田幸子、中野匡隆、木野村嘉則。「運動教室に参加している高齢者の健康状況」『長寿社会を健康に生きる―地域の健康づくりをめざして― 地域創造研究所叢書2』唯学書房、2017年3月

#### (学術論文)

- ・尚爾華、王亜婷、馬利中。「中国上海にある医療機関従事者における出産・子育てに関する意識調査～「二人っ子政策」開始2年間の現状をふまえて～」『東邦学誌』第47巻第1号、2018年6月、91～98頁
- ・尚爾華。「大学生の食生活実態と食育の課題～朝食の欠食頻度に焦点を当てて～」『東邦学誌』第46巻第2号、2017年12月、151～153頁
- ・澤田節子、肥田幸子、尚爾華、中野匡隆「地域在住高齢者の健康維持活動支援に関する調査」『東邦学誌』第44巻第2号、2015年12月、117～139頁
- ・Masakazu Washio, Kazuyuki Takeida, Yumiko Arai, Erhua Shang, Asae Oura, Mitsuru Mori. Depression among Family Caregivers of the Frail Elderly with Visiting Nursing Services in the Northernmost City of Japan. International Medical Journal Vol. 22, No. 4, pp. 250 - 253, 2015
- ・Yoshie NAGATA, Fumio SAKAUCHI, Hisako IZUMI, Erhua SHANG, Hirofumi OHNISHI, Mitsuru MORI. Association between salivary alpha-amylase activity and stress-related characteristics. Sapporo Medical Journal Vol. 80. No.1-6. December 2011

#### (学会発表)

- ・尚爾華、加藤利枝子、中川弘子、鈴木貞夫、女性高齢者における年齢階級別健康状況・生活習慣および主観的な健康度に関する調査～名古屋市内にある体操教室の女性参加者を対象に～、浜松. 2018. 7. 6

- ・尚爾華、韓萌、森満. 中国における栄養士育成の現状について. 第 63 回北海道公衆衛生学会, 札幌, 2011. 11. 10-11

(その他)

<セミナー・研究会発表>

- ・尚爾華. 日本における小児保健分野の取り組み～健やか親子 21 (第 2 次) について～. 少子高齢社会の健康と福祉セミナー. 中国上海市. 2019. 2. 28.
- ・尚爾華. 平成 30 年度スポーツリーダー養成コース講習会 講師 「スポーツ指導者に必要な医学的知識」. 尾張旭市. 2018. 12. 22.
- ・尚爾華. 日本における少子高齢化に関する政策について. 中国上海市浦東区浦南病院学術交流会. 2018. 3. 12
- ・尚爾華. 中国の公衆衛生現状と課題～最近 10 年の高齢者及び乳幼児の健康と福祉に焦点を当てて～. 名古屋市立大学医学部公衆衛生セミナー. 2017. 12. 23

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- ・平成 30 年度(新規) 地域創造研究所研究補助金少子高齢化社会の健康と福祉研究会代表者一採択
- ・平成 29 年度(継続) 地域創造研究所研究補助金地域の健康づくり研究会 代表者一採択
- ・平成 28 年度(新規) 地域創造研究所研究補助金地域の健康づくり研究会 代表者一採択

○所属学会

日本公衆衛生学会、日本疫学会、日本健康学会、日本国際保健医療学会、日本学校保健学会、東海公衆衛生学会、北海道公衆衛生学会

○自己評価

論文投稿と学会発表は概ね計画通りに目標を達成した。その他に 1 本の論文が査読中である。また、地域創造研究所の研究補助金により、中国上海市において、少子高齢社会の健康と福祉セミナーを主催者として半年間をかけて企画・調整し、当日に無事に開催できた。予定よりも多くの日中の専門家が参加し、国際学術交流を実現したことが大きな成果として挙げられる。各参加者の要望に応じて、次年度は日本で開催することが決まり、引き続き研究と交流を続けたい。

### III 大学運営

○目標・計画

(目標)

入試委員会委員、学生寮委員会委員として貢献する。人間健康学部 FD・図書・情報ワーキング、入学前教育ワーキング、専門演習運営委員として貢献する。

(計画)

入試委員会、学生寮委員会で参画し、役割を果たす。FD ワーキングのメンバーとともに、授業改善や入学前教育の実施、専門演習の運営に取り組む。

○学内委員等

学生寮運営委員会委員、入試委員会委員

○自己評価

入試委員として、皆勤で入試日 (12 回) の業務を担当した。1 年を通して、面接や試験監督などミスなく仕事をこなした。学生寮委員としては入寮生の面接を担当し、留学生の個人的な相談に乗るなど役割を果たした。

学部 FD ワーキングメンバーとしては、「卒業論文を書く学生への支援」をテーマに学部内で発表

した。図書・情報ワーキングメンバーとして、専門図書の充実のために、先生方の選書をまとめる役割をした。入学前教育ワーキングメンバーとして、入学前課題の選定、入学前セミナーのスケジュールと内容・担当者の調整など、学部長と学術情報課と報告・連絡しながら進めた。専門演習運営委員としては、全4年生の卒業論文の登録、審査、教務課提出まで連絡・調整、卒業論文集の作成を担当した。

#### IV 社会貢献

##### ○目標・計画

(目標)

- ①地域在住の高齢者と健康づくりサポート活動を通じての交流を積極的に行う。
- ②名古屋市国際交流センターの依頼による国際交流活動が続ける。

(計画)

- ①名古屋市内健康体操教室の主催者の協力者になり、地域住民と交流を深める。
- ②名古屋市国際交流センターの依頼により、愛知県内市民団体や小・中学校での児童・生徒との国際交流活動が続ける。

##### ○学会活動等

地域創造研究所「少子高齢社会の健康と福祉研究部会」を立ち上げ、主査として務めた。主な成果としては、本学教員と中国上海の研究者と協力して、「少子高齢化社会の健康と福祉セミナー」(上海市)を開催し、子どもや高齢者の福祉や健康問題に関する国際学術交流ができた。また、本学の組織や教育内容を紹介するなど、現地大学関係者への広報もできた。

##### ○地域連携・社会貢献等

名古屋市国際交流センターの依頼により、愛知県内観光ボランティア団体、小学校(1校)、高校(2校)の生徒を対象とした講演活動が続けた。また、愛知サマーセミナー2018(椋山女学園大学)で、多文化共生やマイノリティについてゲストスピーカーとして参加した。

##### ○自己評価

地域体操教室を通じて、高齢者と触れ合い、住民の健康づくりに貢献した。また、本学着任と同時に始めた国際交流活動を地道に続けて、名古屋市民の国際相互理解を深めることに微力ながら貢献した。

#### V その他の特記事項(学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等)

英語で学会発表や論文執筆のスキルアップ講座を受講している。

#### VI 総括

昨年に引き続き、学内業務(入試委員会委員、学生寮委員会委員、人間健康学部FDワーキング、図書・情報ワーキング、入学前教育ワーキング、専門演習運営委員)は多く担当した。その役割を果たし、一定の貢献をしたと思う。

教育面では、授業プリントを学期前にウェブにアップすることを試み、学生から高い評価を得た。次年度も更に教材研究をし、演習に関するオリジナル教材を開発したい。研究面ではテーマに沿って目標達成ができた。次年度にはもっと論文の執筆と学会発表に力を入れたい。